

東海市立平洲記念館作成

【嚶鳴館遺草解説】

この嚶鳴館遺草は全六巻から成っている。

その叙文は江戸聖堂の祭酒（学政を掌る長官）である、林述斎が書き、跋文は平洲の嗣子徳昌が書いたものであつて、原本は平洲の門人であつた西条藩士の上田雄次郎（子成）が書き、平洲の没後三十三年の天保六年乙未に翻刻された。

跋文に

「先君子平洲先生国字遺書、存篋笥者若干巻、所応干諸侯及諸子需者 十居七八焉、辞世已久矣……」とあり、平洲の国字遺書で、先生の篋笥の中にあつたもので、米沢、尾張、西条の諸侯に応えた所のもの、及び弟子の嚶鳴館諸学生に送つた文章の中のを遺草としてまとめたものが即ちこれである。

本書は読み易く、解し易いばかりでなく、頗る具体的にしかも、また感銘的に「修身治国平天下」を説いており、広く世に読まれ多大の感化影響を与えた。

幕末の志士、吉田松陰はこの嚶鳴館遺草を読み、この書は「経世済民の流れであつて、読めば読むほど必ず力量を増す」と讃辞を与え、自分もこれを愛読し、子弟や友人にもこれを読むことを奨めた。

また明治維新の元勳西郷隆盛もこれを愛読し、流謫の間も此の書を携えて熟読吟味して、遂に全巻を手写して土持政照に与え、「民を治めるの道は此の

一卷で足る」と断言した程で大変貴重な書物である。

その内容は、次の巻からなっている。

卷之一 野芹 上中下

卷之二 上は民の表、教学、政の大体、農官の心得

卷之三 もりかがみ、対人之問忠、建学大意

卷之四 管子牧民国字解

卷之五 つらつらぶみ

卷之六 花木の花 本末、対某侯問書

附録 与樺世儀手簡

※東海市史編さん委員会『東海市史』資料編第三卷

昭和五十四年（一九七九）三月一日発行より

〈凡例〉

一、東海市立平洲記念館蔵の天保六年刊本を底本とした。

一、旧字は常用漢字を用いた。

一、句読点、濁点を付け加えた。

(例) すへし ↓ すべし

一、異体字・合成字・略体字は通行の字体に改めた。

(例) かゝる ↓ かかる

一、卷三の建学大意には、文字が空白になっている箇所があり、中村幸彦「細

井平洲嚶鳴館遺草（抄）」『近世後期儒家集・日本思想大系四十七』一九

七二年・岩波書店によって補い、「」を付して示した。